

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2014-03-01

特集 都市景観と橋梁

目次

- 表紙
「都市から橋を考える」
／(文) 中井 祐
／(写真) 栗原 裕
- 見開
TDA NEWS
緊急特集
「都市デザイン交流会フォーラム
2014『隅田川の景観・歴史的橋梁
の文化的価値を考える』報告」
／井上 洋司
- 見開
特別寄稿「橋梁と色彩」
／吉田 慎悟
- 見開
ランドスケープ事情
「つなぐ役割、むかえる役割として
の橋—世界の水辺空間から」
／小林 正美
- 裏表紙
景観文化Q&A
新シリーズ「街とアート」
／工藤 安代
- 裏表紙
景観ビジネス最前線
／(株)デジタルキアロ
- 裏表紙
ホワイトボード



都市から橋を考える

戦前の技術者は、都市に架けられる橋を市街橋あるいは街路橋と呼び、一般的な道路橋と区別していた。つまり、都市の橋は都市空間の一部である、街路の一部である、という常識があったということである。だからこそ、いまに残る戦前の名橋の多くが、構造だけでなく、幅員構成や舗装、高欄、照明、親柱、橋詰広場などに意を払って、空間としてもデザインされている。つまり彼らは、公共的な建築物と同じように、橋も都市の空間文化の成熟を象徴する舞台装置のひとつであることを、よく理解していたのだと思う。たとえば、関東大震災からの復興事業の一部として架設された隅田川橋梁群は、当時の思想をいまに伝える優れた事例のひとつである。

戦後になって、街路構造令の廃止が関係しているかも知れないが、市街橋、街路橋という呼び名は忘れ去られた。以来橋は、都市の風景の主役の座を失い「道路」という交通を処理する機能空間の一部になりさがってしまった。いや、考えてみれば橋だけではない。都市そのものが、いつしか機械のごとき機能体として扱われるようになり、その効率性や合理性の追求が自己目的化した。戦後の橋は、いわばそのひとつの象徴なのだろう。

実際、戦後の市街橋・街路橋の名作はと問われると返答に窮する。ただ幸いにして、思想は完全に絶えてはいない。東京には隅田川橋梁群があり、大阪にも、戦前の都市計画事業でつくられた数々の名橋などがあり、当時の思想をいまに伝えている。これらの橋を眺めながら、あらためて都市について思いをめぐらせるのもよい。われわれが、そも都市とはなんであったかを思い出したとき、都市風景の主役の座を、橋がとりもどすことができるのだと思う。

GSデザイン会議・東京大学教授 中井 祐

緊急特集

都市デザイン交流会フォーラム2014 『隅田川の景観・歴史的橋梁の文化的価値を考える』報告 景観文化編集長 井上 洋司

2014年2月22日(土)に、8団体共催^{※注}による上記交流フォーラムが台東区立浅草文化観光センターで開催された。

当日は150名ほどの参加者があり、中井祐氏（GSデザイン会議／東京大学教授）による隅田川の橋の歴史を中心とした講演、中野恒明氏（都市環境デザイン会議／芝浦工業大学教授）による完成当時の吾妻橋の色彩の再現に関する報告、小林正美氏（景観デザイン支援機構／明治大学教授）による海外の橋の事例報告、谷内加寿子氏（東京都都市整備局・景観担当課長）による現在の都の橋梁に関わる行政的スタンスの説明があり、その後、パネルディスカッションが行なわれた。



このフォーラムは吾妻橋の塗り替え計画をきっかけに企画されたものだが、中井氏、小林氏には寄稿をいただいているので、ここでは後半の吾妻橋の塗り替えに際する色についてのパネルディスカッションの概要を報告する。

■ パネルディスカッションの報告

吉田慎悟氏（TDA理事）の主旨説明から始まり、(株)デジタルキアロの全面協力で作成された、各パネリスト発案の色になった吾妻橋のシミュレーションがスクリーンに映し出され、その場で微妙な色調調整を行いつつ説明に、会場から頷きや驚きの声があがった。各氏の発言は以下の通り。

● 尾登誠一氏（公共の色彩を考える会会長）

対象特性／物語特性はこの種の構造物では特に重要。構造美を浮き上がらせ、力の伝わりを視覚化する鉄色をお勧めしたい。また青みがかった鉄色は、四神相応での東（吾妻）を象徴する青竜の青にも通じ、かつ隅田川の全体像を青竜に見立てると、その一部の色といえる（案5）。※シミュレーション上の問題で、尾登氏の“鉄色”がうまく表現されていない。

● 宮沢功氏（TDA代表理事）

他の橋も含めて色彩を考えるべき、歩く人や川辺から見るとの視点も大切。さらに橋だけでなく背景の建築物も重要で、橋に見合う建築でもあるべきだ。とにかく優先順位を決めて考えるべきで、橋の色だけの議論ではいけないとした上で、アーチ部と照明柱を明るめ、高欄を暗めにした赤系の案を提案（案2）。

● 杉山朗子氏（TDA正会員）

地域の色を反映し、浅草の雷門などの色使いを参考にしたベンガラ色（案3）、江戸からつながる土地の気風を考慮し創建当時の周辺の橋梁色彩の傾向に合わせたブルーグレー（案4）の2案を提案。



ほかに完成当時の色は不明であるが、小松崎茂（画家・1915～2001年）の挿絵の色をヒントに完成当時の色を想定した中野氏案（案6）、現況と同等の色で塗り替えた場合の案（案1）の6つの案が提示された。



中井氏の「橋は都市の重要建造物であると同時に橋梁の多様性と統一を如何に作り出していか、この著名橋の建設で消えた“江戸”をどのよう東京に繋げていか、その一部に色彩計画が重要な役割を果たすのではないか」。谷内氏の「川の連続性と川を挟んだ地域の活性化が橋を中心に行われる事は素晴らしい」というこのフォーラムに対する評価をいただく場面もあった。

その他、構造体と上部とは違う色にすべきであるとする小林氏の意見に同調する意見が会場からでたり、色彩の氾濫する東京に対する危惧など、橋の色の議論が、街の景観に対する意見にまで広がり、予定時間を過ぎるほどの盛り上がりを見せた。最後に参加者がそれぞれ1位、2位の案に投票を行い閉会した。

注) 共催団体：都市環境デザイン会議 [JUDI]、景観デザイン支援機構 [TDA]、公共の色彩を考える会、GSデザイン会議、土木学会 [JSCE] 景観・デザイン委員会、日本建築家協会 [JIA] 都市デザイン部会および城東地域会、カラービジネスネットワーク [CBN]
後援団体：台東区・墨田区・隅田川リネサンス推進協議会

ランドスケープ事情

「つなぐ役割、むかえる役割としての橋 —世界の水辺空間から」



金門橋

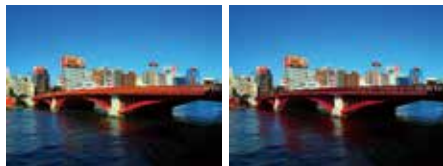


レオポール・セダール・サンゴール橋

「橋」の主要な第一の機能は、異種の領域をつなぐ役割であり、ブリッジという英単語にはすでに「連結する」という意味が含まれている。また、古来仏教では迷いや煩悩という川を超越した理想の境地として「彼岸」が定義された。これはある意味では、川という人知を超えた領域に対する畏怖と憧れを表象し、いわば川に対する直交的な心理軸を意味していると言えよう。昔は船による有料の「渡し」で生活していたところに、近世以降土木スケールの橋が完成し、簡単に人々の往来が可能となり、市民の生活領域や感覚が大きく変わったことは容易に想像される。日頃私たちが橋を渡る時に感じるワクワク感や、移動するときのダイナミックな景観変化は、橋が果たす「既知と未知をつなぐ」重要な役割を示していると言えよう。

一方、川に対する平行的な心理軸についてはどうか？ 従来、川では舟運が重要な役割を果たしており、外洋の船が入る大きな港などでは、橋が重要な「ゲート」の役割を果たしてきた。これは、「橋」が上下に移動する舟運の動きに対し、外と内の領域を切り結ぶ重要な役割を果たしてきたと言えよう。例えば、（川ではないが）サンフランシスコの金門橋やシドニーのハーバー橋、ロンドンのロンドン橋、などは明らかにそれを意識し、それぞれの都市を強く象徴づける重要なランドマークとなっている。

パリのセヌエ川の一連の橋群も明らかにゲートを意識したデザインであり、横からの視線、下を通る船からの視線が強く配慮されている。ポンヌフ、ポンデザールなどは中でも有名だ



●案1 (現状同等) 1位5票/2位2票 ●案2 (上下差あり赤系) 1位4票/2位12票



●案3 (ベンガラ色) 1位23票/2位12票 ●案4 (ブルーグレー) 1位10票/2位11票



●案5 (青みがかった鉄色) 1位8票/2位24票 ●案6 (完成当時挿絵ヒント) 1位23票/2位10票

特別寄稿

「橋梁と色彩」

TDA 理事・色彩計画家 吉田 慎悟

1970年代の始め頃、橋梁の色彩は今日のように多くはなかった。例えば国鉄の鉄骨の橋梁はすべて無彩色の灰色だったように記憶している。

1987年には国鉄も民営化にともない無彩色ばかりではなくなった。河川の橋梁はそれよりも前から明るいブルーや黄緑やクリーム色に塗装されることが多くなり、都市内の歩道橋も同様にカラフルになっていた。そのような色彩化の流れの中で隅田川に架かる橋梁群は、さらに鮮やかな色彩が選択されている。「ふるさとと呼ばれるま

ちづくり…隅田川著名橋の整備」の報告書は1984年に出されている。ここで定められた基本方針に従って、吾妻橋は下町らしさを象徴する色彩として赤、蔵前橋は昔近くに御米蔵があったことから歴史的な温かみを感じさせる色彩として黄色、そして厩橋は上流の駒形橋の下流の青系と蔵前橋の黄系との中間の色彩として緑系の色彩の塗装が決められた。また当時、隅田川沿いを走る首都高速道路もコーラルと呼ばれる赤系の色彩で塗られていた。この頃が日本の橋梁色彩の高彩度化のピークだろう。

1990年頃、私が関わった橋梁の色彩検討会では、7つのアーチが虹を連想させるということで、赤橙黄緑青藍紫の原色でアーチを塗り分ける案が検討されていた。私はこのような連想遊びのような色彩計画には反対したが、多くの委員にはこの案が魅力的だったらしく、私が欠席した委員会で虹の橋梁案は通ってしまった。

私は二子玉川の近くに住んでいて、多摩川の土手によく散歩した。そこで投網を使う鮎漁や、河川敷で行われる野球の試合や、市民マラソンも見た。その様な景色の中で橋梁はいつも背景としてある。河川の自然に対して橋梁は人工的で、それだけでも存在感が大きいので、そこに鮮やかな強い色彩を



パリのセーヌ川に架かる橋梁群

塗装すると目立ち過ぎて、自然や人々の営みを感じ難くなる。我が国には神橋のように、地域の特別な場として朱色に塗って象徴的に見せる橋もある。しかし、多くの一般的な橋梁の色彩は周囲の自然景観を脅かさない低彩度の色彩範囲に抑えるべきであろう。

近年、橋梁を景観の一部として位置付け、地域景観全体を捉えて良好な色彩を選定した事例も増えてきた。国土交通省の「景観に配慮した防護柵推進検討委員会」は2003年に防護柵のガイドライン案を取りまとめているが、その中で防護柵の色彩はダークブラウン(10YR2.0/1.0)、ダークグレー(10YR3.0/0.2)、グレイベージュ(10YR6.0/1.0)の3色の中から選ぶことを基本としている。

静岡県では、これまで様々な色彩で塗装されてきた橋梁の色彩を総合的に見直し、大規模で景観的に大きな影響を与える橋梁は、景観アドバイザーと共に現地個別に検討するが、小規模の橋梁はグレイベージュで統一的に塗装し直している。

環境色彩計画とは、個々のものを主役として飾ることではなく、すべての景観要素の色彩を総合的に調整して、美しい地域の景色を取り戻すことが要求されている。



隅田川に架かる橋梁群 (台東区役所提供)

小林 正美 TDA 正会員・明治大学教授



シモーヌ・ド・ボーヴォワール橋



ジョン・W・ウィークス橋

が、近年レオポール・セダール・サンゴール橋という歩行者専用の木製デッキの橋が新たに付け替えられ、右岸のテュイルリー庭園と左岸のオルセー美術館を結ぶ新しい歩行導線が形成された。また、最近では国際コンペを通してドミニク・ペローが設計したフランソワ・ミッテラン国立図書館の前に、シモーヌ・ド・ボーヴォワール橋が新しくデザインされ、右岸のベルシー地区と結ばれることになった。ここでは、歩行者だけではなく自転車も渡れるように、二重のレベルが交錯した前例のない構造形式を用いられており大変興味深い。米国の例では、マッキム・ミード&ホワイトという連名の建築家が、ケンブリッジ市のチャールズ河にデザインしたジョン・W・ウィークス橋を紹介しておきたい。この橋のシルエットはいつ見ても美しく、周辺の景観と調和しながら強く特徴づける役割を果たしており、留学時代以来、今でも筆者の目に焼付いている。これらの橋群では、特徴ある立面が強く意識されたデザインであるところが共通である。

これらの海外事例を通して日本の橋梁デザインを考えた時に、山口の錦帯橋に代表される全国のアーチ橋や日本橋、レインボウブリッジなど、デザインレベルが決して欧米に劣っているとは思わない。かといって、すべてが周囲の地域の歴史や景観に調和しているかと問われれば、あまり自信がない。今後、都市格をふまえた質の高い都市デザインを考えていくためには、広く市民の目も取り込んだ景観デザインの議論を深めていかなくてはならないだろう。

Question : アートは都市や地域にどのように貢献しているのでしょうか？

Answer

アートと都市の関係は長い歴史を持っています。

ただ日本で、いわゆる“ART”という西洋的芸術概念が取り入れられたのは明治期に遡ります。西洋社会の仕組みや文化、美的価値観が社会に流れ込み、街が西洋化されるなかで歴史的英雄の銅像等がつくられる事が長く続きました。

時代は下り、1970年代頃から、地方自治体が「彫刻のあるまちづくり」を競いはじめ、バブル経済期“パブリックアート”という言葉が欧米から輸入されると、公共施設の整備と共にアート作品が街に急増しはじめます。企業も自社ビルをアートで飾り文化的な香り付けを求め、日本中でパブリックアートの無い場所を穴埋めするような勢いが続きました。この追い風景気に“環境アーティスト”も数多く出現し、優れた作品も生まれましたが、発注主の希望を丸呑みした物わかりのいい作品や、設置場所の文化や歴史といった文脈、地域住民の希望をまったく無視した作品も多数生まれました。

‘90年代中頃になるとこの様な状況に“NO”を唱える声が高まり、アート作品という「もの」をつくるのではなく、アートで「こと」を起こそう、活動の場として地域社会をもっと尊重しよう、という考え方が広まっていきました。

社会もバブル経済の破綻と不良債権の処理に体力を奪われ、「アートは贅沢品」という世論も生まれ、高額のパブリックアートは地域からの共感が得られず、「彫刻公害」と言われほどの状況に陥ってしまいました。その反動として、お金をそれほど使わずとも地元の人びとが関わり、有益なものができるのではないかという思いが人々に共有されはじめたのです。

ほぼ同時期に、海外アート界にも大きな変化が起きました。「もの」としての作品づくりから、鑑賞者と「こと（関係性）」を積極的につくり出し作品化するアーティストの新たな表現が注目を浴びはじめたのです。国際社会のグローバル化に伴い、日本でもアーティストが都市空間でアート展を開く等、地域と関わりを見出そうとする動きが活発化していきました。

その代表例が、福岡の街なかで開催された『ミュージアム・シティ・天神』（1990～96年）や東京青山を舞台とした『モルフェ』（1995～2000年）等です。2000年代に入ると、住民と共に地域の社会問題にアート活動を活用する動きがさらに増加していきました。こういった活動は“アート・プロジェクト”とよばれ、日本社会に浸透していき、アートが街の人々と直接的に関わる時代へと変化していきました。



『From Day To Night』 ナイジェル・ロルフ作
ミュージアム・シティ・天神 (1992)

景観ビジネス最前線



思いを伝える・思いが伝わるCG技術



デジタルキアログループは、26人の建築・土木・都市計画CGの専門集団です。

株式会社 デジタル キアロ

代表取締役：小野寺義勝
副社長・TDA 理事：西田幹

本社	〒981-3125 宮城県仙台市青葉区みずほ台 9-1-109 URL : http://digital-chiaro.co.jp/ Tel : 022-346-8511 Fax : 022-346-8512
東京オフィス	〒111-0032 東京都台東区浅草 1-34-1-6F (担当：古関) E-Mail : koseki@digital-chiaro.co.jp Tel : 03-5806-4161 Fax : 03-5806-4162
仙台オフィス	〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町 1-14-18-501 (担当：高橋) E-Mail : takahashi@digital-chiaro.co.jp Tel : 022-748-5763 Fax : 022-748-5764

ホワイトボード

今回の『景観文化』は、TDAも共催団体の一つとなった「都市デザイン交流会フォーラム2014」のテーマにちなんで「都市景観と橋梁」特集とした。都市景観の中で橋梁の役割・位置づけを考え直すきっかけとなればと考える。本紙はつねに「まちづくり」に

関わる人に対し様々なヒントを与え続けられる媒体でありたい。その意味でも新規に立ち上げたFacebookページの「景観デザイン支援機構」をチェックしていただきたい。また今号より、編集長に井上洋司が就いた。曽根幸一は名誉編集長となった。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
(株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / 三井不動産(株) / (株)都市環境研究所 / 東京ガス用地開発(株)

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-3847-3375 E-mail : main@tda-j.or.jp
<http://www.tda-j.or.jp> [編集：(株)アーバンプランニングネットワーク] 2014031000